

## 甘粕正彦と森慶治郎のこと

尾西 康 充

東京憲兵隊麹町分隊長であった甘粕正彦中尉は、一九二三年九月一日に発生した関東大震災の混乱に乗じてアナキストの大杉栄と伊藤野枝、大杉の妹あやめの長男橘宗一（七歳）の三名を憲兵隊本部に連行して虐殺した後、本部建物裏にある古井戸に遺体を投げ込んだという「甘粕事件」の首謀者とされてきた。その一方で後年、満州映画協会の理事長となつて紳士然とした態度をみせるなど、非道な暴力をふるつた人物とは思えない面を持っていた。佐野真一氏の大作『甘粕正彦・乱心の曠野』（二〇〇八年五月、新潮社）は周到な取材にもとづいて、知られざる甘粕の素顔を解明し、甘粕自身はこの事件と無関係であったことを証明した。この大著を読んで大変ショックングであったのは、甘粕家が三重県とゆかりの深い人物であつたことや、甘粕事件で実際に大杉と伊藤を殺したとされる東京憲兵隊本部附特別高等課係員の森慶治郎曹長が津市出身であることなど、私にとって本来身近なことからであるにもかかわらず、これまで何も知らなかつたことであつた。佐野氏に多くのことを教えられ、自分の怠惰を恥じ入る気持ちになつた。同書の執筆

に当たつて佐野氏が三重県を訪れてインタビューした関係者の多くは高齢者であつたことから、ほとんどの方がすでに亡くなつてゐる。現時点で調べることのできたことを、つぎに整理してみよう。

甘粕は三重県立津中学を二年終了時に中退し、名古屋陸軍幼年学校に進学した。順当に卒業していれば、一九一〇年三月に卒業した津中学第二六回生名簿のなかに甘粕の名前が記録されているはずである。しかし原則として中退者は名簿に記録されないために、津中学の卒業生の多くは甘粕が自分たちの学校にかかわりのある人間だとは知らなかつたのである。ちなみに甘粕と同じ第二六回生は、「春よこい」「浜千鳥」などの名曲で知られる作曲家の弘田龍太郎や、小樽商業学校で小林多喜二に国語を教えた渡辺卓がいる。また甘粕の弟たちも同校を卒業し、二郎は第二九回生（一九一三年三月卒業）、四郎は第三六回生（一九二〇年三月卒業）、五郎は第四一回生（一九二五年三月卒業）として卒業生名簿に記録されている。

山形県士族であつた甘粕の父春吉（一八六〇〜一九二二）は、

『三重警察史』第二卷（一九六五年一月）によれば、当時の日本の植民地とされた台湾・台南県の休職警部であったが、一九〇〇年六月二三日、三重県警部に転じて県警衛生課長となった。一九〇〇年七月一日に警視特別任用令によって、宇治山田警察署長として津署長下坂三俊とともに警視になる。これは内務省告示第四八号に従って「警視ヲ置クヘキ警察署」として三重県内で津と宇治山田の警察署が指定されたからであった。

この後、春吉は一九〇二年五月一日に桑名郡長、一九〇四年二月二八日に飯南郡長、一九一二年六月二二日に鈴鹿郡長となった後、一九一三年六月一日に免官となった（『三重県史資料編』政治行政1）。山田勘蔵の『明治百年松阪略史』（一九六八年四月、夕刊三重新聞社）によれば、春吉が飯南郡長を務めていた一九〇五年一月一日、明治天皇が伊勢神宮参拝の折に有松英義三重県知事に対して本居宣長の「鈴屋遺跡の現状如何」という質問をしたところ、有松は春吉の説明をもとめて答えた。これをきっかけに鈴屋遺跡保存会が結成され、春吉は幹事長に就任、一九一一年には郡長として飯南郡図書館建設委員長となったという。翌年四月一日、春吉は図書館設立趣旨に即して建物を飯南郡記念館と呼ぶことを提案し、郡長を館長として一般の閲覧に供することになったという。

甘粕事件の直後、甘粕の弟五郎が「大杉一派」のアーキストによって報復されたことが『三重警察史』第二巻に記録されている。同書によれば、ギロチン社の河村貞三（田中勇之進）

が一九三三年一〇月四日、飯南郡松阪町の岡寺継松寺に寄宿していた津中学五年生の五郎（当時一七歳）に報復の目的で殺害しようとし、事件翌日に殺人未遂の容疑で検挙されるという事件がおこった。河村は翌年二月九日に安濃津地方裁判所で懲役五年の判決を受けた。「伊勢新聞」（一九三三年一〇月五日）によれば、「四日午前七時十五分頃」五郎が通学のために松阪駅に向かう「清光寺墓地裏の細路」で、「三十歳位の背広三揃の洋服を着た男が躍り出し、五寸ばかりの短刀を振舞って五郎を目がけて斬り付けんとせる刹那、件の怪漢を尾行してゐた松阪署の前田刑事が駆付けて兇器を撿ぎ取り格闘の末逮捕し松阪署で厳重取調べ中である」という。

大杉と伊藤を実際に殺した者として佐野氏が推定しているのは、現在の地名でいえば津市大里睦合町東睦合の森（一八九〇年一月二日〜一九六一年一月六日、腰の病気で死亡）である。一九三三年二月八日、森は軍法会議で懲役三年の実刑判決を受けた。起訴された五名の憲兵のうち有罪になったのは甘粕（懲役一〇年）と森だけであった。森は紀元節の恩赦によって刑期満了を待たずに一九二五年二月一日に仮出獄した。その後は大里村に帰郷し、家業の酒屋を営み、一九四〇年三月から一九四六年九月までの間、官選の大里村長を務めた。『大里村史』（一九五九年一月、大里村史編纂委員会）によれば、森は「特に大東亜戦争下の供米、動員等極めて多難の中にあつてよく本村の発展に尽力せられた」と好意的に紹介されている。三重県

史編纂室の調査でも、戦時下の大里村は政府の経済厚生運動に従って供出米を増やした模範村であったとされている。

さらに文献を調べてみると、森は戦後公職追放されるが、その後、自己の復権をかけて村長選挙に出ていたことが分かった。大里村と高野尾村とが一九五七年一月一日に合併して豊里村となった後の第一回村長選挙が二月八日におこなわれた。大里からは大字睦合の森（当時六七歳）と大字山室の中川林助（六三歳）、植田春郎（五八歳）が立候補した。選挙戦は現職の大里村長である中川と、元村長の森との一騎打ちで、植田は「農協本党」を名乗るが選挙に勝てるだけの實力はなかった。選挙当日の「伊勢新聞」の報道によれば、「森氏は戦時中村長をつとめ公職追放後長く公職につかず返り咲きをねらって懸命、中川氏は合併当時の村長とあって旧高野尾村にもくい入り、両者の争いは伯仲、予断を許さない情勢」で、「有権者総数三千四百、うち旧高野尾村は村長立候補者がなく草刈り場、この地区の動向が勝敗を決するものとみられている」という。だが甘粕事件を知る地元住民の間では、森は「人殺し」と噂されており、人望のない酒屋であった。戦前なら任命制で村長になれたかもしれないが、豊里村ができたときには、元憲兵の村人までが森を「人殺し」と呼び、多くは中川陣営に味方したという。

森の人となりを知るために、森の甥に当たる津市大里東睦合の若林光男氏（一九二六年生まれ、八三歳）に会って、生前の森のエピソードを聞いてみた。若林氏によれば、森はどこにも

行かず、酒屋の奥の座敷にこもりがちの生活を送っていた。雨の日、農作業ができなくなって自分が森家の酒屋の店番をしていると、奥の座敷にいた森が大層かわいがってくれた。日記や書簡などの類は一切遺されていないが、自分だけには真実を話し、後世に語り継いでもらおうとしていたように思われた。森が語るには、甘粕は親しみの湧く人で、決してホラを吹くような人ではなく、自分の一生を授けた方であった。甘粕事件の際、自分が大杉と伊藤を殺した。子どもを殺せという命令が上から来た。できれば殺さない方がよかったが、同情心はなかった。刑務所を出るとき、他の憲兵仲間から「お前はよくやった、刑務所での務めも果たした」といわれてたくさんの見舞金をもらった。金貨や銀貨はズボンのどこかに縫いこんで汽車に乗って大里村に帰ってきたという。

若林氏によれば、一九五七年の村長選挙の際、自分が選挙参謀を務めたが、七六票の僅差で敗れた。森は落選したものの、落胆していることが周囲の者に分かるような気の小さい男ではなかった。とにかく気の強い人であったという。乃木希典が明治天皇に殉死したとき、真つ先に乃木邸に駆けつけたというエピソードもあった。

再び佐野氏の名著に戻れば、終章には「元憲兵は、甘粕という負の世界のスーパースターの陰に隠れて事件から八十年以上埒外に置かれてきた。甘粕の巨大な影が、彼らの存在を覆ってきたともいえる」との記述がある。実行犯とされる憲兵たちの

存在に着目し、彼らを追跡しながら甘粕事件の全容を解明したのは、佐野氏の見事な功績である。しかし上官の面子をまもるとともに部下をかばうために、甘粕が黙って罪を引き受けたとする「軍人の美学」、あるいは「甘粕の美学」は、私には到底承服しがいなものである。甘粕は「陸軍のスケープゴートとして日本帝国によって引き裂かれた」存在であったとされるのだが、甘粕が終生真実を語らなかったことは、非道な暴力によって生命を奪われた犠牲者を冒瀆し続けることになったのみならず、その後の歴史において軍部が暗躍し一層の横暴をふるうことに手を貸すことになったのではないか。

若林氏は戦争末期、陸軍の通信兵として広島に駐留しているときに被爆した。終戦後は帰郷して農家を継ぐが、原爆症のために頭痛や高熱に冒され、農作業もままならなかったという。体中がだるくて寝込んだ日の続く若林氏に、森はいつも優しく接してくれたという。温暖で穏やかな農村に生まれ育った森がなぜあのような凶事を引き起こしたのか。隣町に住む私にとつて、佐野氏という「スーパースター」の甘粕よりも、本来は平凡なひとりの市民であったはずの森こそ、人間を残忍な殺人鬼に変えてしまう軍隊組織の暗黒面を明らかにする手がかりとして取りあげてみたいと思う人物である。

「おにし・やすみつ 本学教員」